

DAWN こらむ自由席 (1)

生き方・住まい方 デンマーク・人生の舞台 編

弘本由香里

「人生の第三期をあなたはどんなふうに生きていきますか？」デンマークで、そんな問いかけからスタートする住まいづくりに出会った。市民自身が積極的に人生の第三期の舞台づくりに取り組む、シニア・コ・ハウジング(高齢者の協同住宅)プロジェクト。社会教育と、住宅政策・福祉政策が連動して、個々の人生の主体的な選択や表現をサポートしていくシステムである。

これまでの人生を振り返り、これからの生き方を考える、その舞台としての住まいを協同で作りあげていく。市民主導のプランが、行政やNPOや専門家のバックアップで、現実のものになっていく。なんとクリエイティブなライフイベントだろう。

主役は、高齢の単身者か夫婦世帯。十から二十程度の独立した住戸がつながる、比較的小規模のテラスハウス型の集合住宅が多い。生活をエンジョイすることに、一番の重点が置かれている。世帯間で家事の分担まではしない、お互いにちょっと声を掛け合う程度の気持ちの支え合いで十分というスタイル。中心にハートと呼ばれる共有空間・設備を持ち、木工や織物やダンスやティーパーティなど、住み合う面々のライフスタイルに合わせて、ハートの中味もバラエティに富む。

なによりも目をみはるのが、一つ一つの住戸のインテリア。ドアを開くごとに思わず歓声をあげてしまうほど、住まい手の個性が溢れるばかりである。自慢のコレクションが並び、自分の世界に没頭する屋根裏のアトリエや書斎、吟味されたアート&ファニチュアなどなど。住まうという営みが、その人の内面を豊かに耕し、コミュニケーションを誘発する、人生の表現手段そのものとなっている。

仮に車イス生活になろうとも、寝たきりになろうとも、住まいがその人の表現空間であり続けることが、生きていくために何よりも欠かせないことなのだあたりまえに考えられている。望めばそこでターミナルケアも受けられる。

とはいえ「高齢者だけで住み合っていて、将来に不安はないのだろうか」そんな疑問は、ものの見事に吹き飛ばされた。「人生には、いつの時だって完璧な安全というものはないのですよ」と。ついでに「子供たちとの交流は？」とのやばな質問には「たまには会うけど、私達は私達の人生を楽しむのに忙しいのよ(笑)」と一言。いつの時でも「今」が最高の舞台だと胸を張る、生き方と住まい方がそこにあった。